

## ゼロ・クオリアとは何か

篠崎大河

### 1. はじめに

意識の哲学においては、意識のハード・プロブレム、すなわち、ニューロンの興奮のような物理的プロセスがなぜクオリアを持つのか、という問題が取り組まれてきた。ここで中心的な役割を果たしているのは、意識経験の主観的な質、いわゆるクオリアの概念である。意識に対する物理主義的な説明が困難であるのは、それがクオリアを本質とするからであるとされる。クオリアは哲学者の間でその存在が自明視されながら、その本性についてはほとんど合意がない。このような状況において、哲学者たちが何の存在を自明視しているのかは謎であり、クオリアに関する議論は混迷を極めている。本稿の目的は、このような状況を整理するため、意識の哲学においてクオリア概念が歴史的にどう理解されてきたのかを概観し、探究に値するクオリア概念とは何かを明らかにすることである。

探究に値するクオリア概念として本稿が擁護するのは、ゼロ・クオリアである。ゼロ・クオリアとは、K. フランキッシュが提案した概念であり、それ自体は物理的でありうるが、意識経験が非物理的な性質を持つと我々に（誤って）思わせるような性質としてのクオリアの概念である。この概念を採用すれば、意識のハード・プロブレムを疑似問題として回避しつつ、それが真正の問題であるかのように思う我々の直観を説明することができる。本稿は、大まかな特徴づけしかなされていないゼロ・クオリア概念に具体的な内実を補うことで、その有用性を示すものである。

そのためにも、第二節ではクオリアに対する三つの存在論的立場を紹介する。第三節では、クオリア概念の歴史を概観することで、クオリアの議論における問題点を洗い出し、探究に値する概念を提案するためのアプローチにはどのようなものがあるかを探る。第四節では、ゼロ・クオリアが探究に値するものであるということを、その理論的背景である錯誤主義を擁護することで示す。

### 2. 三つの存在論的立場

探究に値するクオリア概念とは何かを考察するためには、クオリアの存在をめぐる議論においてどのような立場があるのかを見ておかねばならない。クオリアに関する存在論的立場は主に三つある。すなわち、急進的実在論、保守的実在論、非実在論である。これら三つの立場の違いは、意識のハード・プロブレムへの応答の仕方によって理解することができる。

まず、クオリアに関する急進的実在論は、クオリアの実在を主張しつつ、クオリアは物理主義的に還元不可能であると論じる立場である。それゆえこれは反物理主義的非還元主義と呼ぶこともできる。急進的実在論は、クオリアが存在するという事実を自然科学の枠組みで説明することは不可能であると論じ、クオリアの存在をプリミティブな事実として認める。すなわち、意識のハード・プロブレムが真正の問題であると認めた上で、それを解決することは不可能であると主張する。このような立場は、既存の科学理論に対して、クオリアの説明不可能性を主張し、新たな存在者を認めるという根本的な改訂を迫る点で急進的である。

ついで、クオリアに関する保守的実在論は、クオリアの実在を主張し、かつクオリアは物理主義的に還元可能であると論じる立場である。それゆえこれは物理主義的還元主義と呼ぶこともできる。保守的実在論は、クオリアをプリミティブな存在者として説明せず、それは自然科学が措定する何らかの存在者に還元されると主張する。すなわち、意識のハード・プロブレムが真正の問題であると認めた上で、それを解決することは可能であると、何らかの物理的事実によってクオリアの存在を説明しようとする。このような立場は、既存の科学理論を保持しながらクオリアの説明を試みる点で保守的である。

最後に、クオリアに関する非実在論は、クオリアは実在しないと主張する立場である。このような主張をする動機は、ほぼ全ての場合、物理主義の擁護にあるので、これは物理主義的非還元主義と呼ぶことができる。(ただし一般には消去主義と呼ばれることが多い。) 非実在論は、クオリアの存在を自然科学の枠組みで説明することは不可能であるという急進的実在論の主張を受け入れた上で、クオリアをプリミティブな存在者として説明しないという方針を保守的実在論と共有する。もちろんそれはクオリアが物理主義的に還元可能な存在者であると説明するからではなく、そもそも存在しないと説明するからである。それゆえ非実在論は、自然科学の枠組みでクオリアの存在を説明できないのは当然でありハード・プロブレムは疑似問題であると論じる。このような非実在論は、物理的プロセスがなぜクオリアを持つのか、というハード・プロブレムの代わりに、物理的プロセスがクオリアを持つかのようになぜ我々は思うのか、という問題が、真正の問題であると主張する。この問題はイリュージョン・プロブレムと呼ばれている(Frankish 2017)。このように、非実在論において、意識のハード・プロブレムは意識のイリュージョン・プロブレムに取って代わられる。フランキッシュはこの点を強調して、非実在論を「錯誤主義(illusionism)」<sup>1</sup>と呼ぶ(ibid.)。

以上のような三つの立場は、還元主義か非還元主義か、物理主義か反物理主義かの二つの対立軸において、表1のようにまとめることができる。

表 1

	還元主義	非還元主義
物理主義的	保守的実在論	非実在論 (錯誤主義)
反物理主義的	— <sup>2</sup>	急進的実在論

では、以上の立場はそれぞれどのようなクオリア概念を採用するのか。この問いに答える上で、フランキッシュの提案した次の区別は有用である。すなわち、古典的クオリア、減量クオリア、ゼロ・クオリアの区別である。これは簡単に言えばクオリアであることがどれだけ強い含意を持つかによる分類である。古典的クオリアが最も強く、減量クオリアが中間であり、ゼロ・クオリアが最も弱い。まずフランキッシュによるそれぞれの定義を紹介しよう。

フランキッシュによる定義(Frankish 2012)

- 古典的クオリア  
内在的かつ言表不可能かつ主観的であるような、経験の内観可能な質的性質。
- 減量クオリア  
経験の現象的性質 (主観的な感じ、〈どのようなことか〉性(what-it-is-likenesses)など)。
- ゼロ・クオリア  
経験が内在的かつ言表不可能かつ主観的であるような内観可能な質的性質を持つと、我々が判断するように仕向けるような経験の性質。

フランキッシュによると、古典的クオリア(classical qualia)という命名における“classical”は「起源的(original)」ではなく、「最大の強さ(full strength)」という意味に近い(Frankish 2012: 668n)。すなわち、古典的クオリアとは、クオリアが持っている一見して思われるような性質(内在性、言表不可能性、主観性、内観可能性)を、全て実際に持つようなクオリアである。上に挙げた定義はあくまで一般的なものであり、特徴づけにはさまざまな仕方がある(ibid.: 668)。とりわけ経験への内在性は、非機能的であるとか、非表象的であるといった性質として考えてよいだろう<sup>3</sup>。このようなクオリア概念は強すぎるため、これを自覚的に受け入れる哲学者はほとんどいない。

反対にゼロ・クオリアは、古典的クオリアが存在するかのように我々に思わせる性質に過ぎず、クオリアが持っていると一見して思われるような性質を実際に持つような何かの存在に対してコミットメントを持たない。すなわちゼロ・クオリアは、クオリアが持っていると一見して思われるような性質のどれ一つとっても、持っているとは限らない。それゆえ、クオリアが持っていると一見して思われるような性質をゼロ・クオリアが全く持っていないことも可能である。すなわち、これは哲学的ゾンビと我々が共有するクオリアである。このように、ゼロ・クオリアは、「クオリア」という語をその名に含んでいるものの、古典的クオリアなら持つような重要な特徴のいずれも持たないという可能性も許容し、「最大の強さ」と対比される意味で「ゼロ」の強さしか持たない<sup>4</sup>。このようなクオリア概念は、非実在論の可能性を具体化する点で示唆的であるが、自覚的に受け入れる哲学者は現在ではまだ限られる。

以上のように、古典的クオリアとゼロ・クオリアは、それぞれクオリアの含意の強さのスペクトラムの両極に位置するような性質である。そして、減量クオリアはこの中間のどこかに位置するクオリアである。それは、古典的クオリアほど強くはないが、ゼロ・クオリアほど弱くはないような概念であり、クオリアが持っていると一見して思われるような性質のいくつかを実際に持つが、いくつかは持たないようなものである。このようなクオリア概念は、理論中立的な被説明項として穏当なものとなされ、ほとんどの哲学者がこれを受け入れているかのように思われている。

以上の三つのクオリア概念は、クオリアに対する三つの存在論的立場の違いを明確にするのに役立つ。まず、急進的実在論は、古典的クオリアと相性がよい立場として特徴づけられる。というのも、物理主義と両立不可能な古典的クオリアの存在を認めることができるのは急進的実在論のみであるため、古典的クオリアを許容するということが、急進的実在論を他の説から区別する重要な指標となっているからである<sup>5</sup>。ついで保守的実在論は、減量クオリアと相性がよい立場として特徴づけられる。というのも、この立場は古典的クオリアを許容することはできないが、クオリアの実在性を認めないわけではないからである。そして非実在論は、ゼロ・クオリアと相性がよい立場として特徴づけられる。というのも、クオリアの実在性を認めない非実在論が許容できるのはゼロ・クオリアのみだからである。

クオリア概念の歴史は、古典的クオリアの強すぎる含意を落としていく、言わば「減量」の歴史として描き出すことができる。そして減量の結果、現在では減量クオリアだけが探究に値するものだと考えられている。それと共に、減量クオリアと相性のよい保守的実在論が支配的な立場になっている。しかし、クオリア概念の歴史において、保守的実在論に有利に働くような減量が本当になされてきたのかは疑わしい。なぜなら、フランキッシュが主張するように、減量クオリアとされている概念はどれも、減量が足りず、古典的クオリアとの違いを示せないか、あるいは減量のしすぎによって、ゼロ・クオリアとの違いを示せないかのどちらかであるかもしれないからである(Frankish 2012)。

### 3. クオリア概念の歴史

本節では、クオリア概念の歴史を概観することで、クオリアの議論における問題点を洗い出し、探究に値する概念を提案するためのアプローチにはどのようなものがあるかを探る。

「クオリア(*qualia, quale*)」という語をはじめて現代のような意味で使ったのはC. S. パースであるが(Peirce 1866)、今日まで続くクオリアの議論の発端となる概念が提示されたのはC. I. ルイス *Mind and the World Order* においてである(Lewis 1929)。彼はクオリアを次のように特徴づけている。

与件の再認可能な質的性格が存在する。それは異なる経験で複現可能(repeatable)であるため、普遍者の一種である。私はこれを「クオリア」と呼ぶ。しかし、そのようなクオリアは経験ごとに再認されるという意味で普遍者であるのだが、対象の性質からは区別されねばならない。[...] クオリアは直接的に直観され、与えられるものであり、いかなる可能な誤謬の対象でもない。なぜなら、クオリアは純粋に主観的だからである。(Lewis 1929: 121)

ルイスのクオリアは古典的クオリアの前身となるものであり、古典的クオリアとしての特徴をすでにい

くつか持っている。例えば、ルイスによるとそれは言表不可能であり、主観的である(ibid.: 124)。しかし注意しておくべきは、ルイスのクオリアは経験の性質ではなく、経験に与えられるもの、すなわち経験の対象<sup>6</sup>の性質であるということである。フランキッシュの定義に従えば、古典的クオリアは経験そのものの内在的性質であるので、ルイスのクオリアは厳密に言えば古典的クオリアではない。ルイスのクオリアは古典的クオリアが考案されるための土台にはなったが、広く共有される概念にはならなかったのである。これは、ルイスのクオリアが、経験の対象が持つ性質ではあっても、外的世界に存在する物理的対象が持つ性質ではなく、センスデータが持つ性質であると解釈された（あるいはそうとしか解釈できない）ことによる(Crane 2000: 179-81; Tye 2017, sect. 1)。それゆえ、センスデータ説の衰退に伴い、対象の性質としてのルイスのクオリアは棄却され、クオリアは経験の性質とみなされるようになる(Frankish 2012: 667)。ここにおいて、センスデータ説という強い含意を落とすために概念が改定されているという点で、すでに最初の減量が行われている。ルイスのクオリアが、センスデータ説を放棄し、経験の性質として捉え直されることで、古典的クオリアが誕生したのである。

しかし古典的クオリアも広く受け入れられるには至らなかった。なぜなら、多くの哲学者が論じるように、古典的クオリアが存在すると考えるべき理由はないからである。古典的クオリアにおいて問題となるのは、それがいかなる物理的な作用ももたらさないということである。古典的クオリアは経験の主観的かつ内在的性質であり、機能的性質ではない。それゆえいかなる客観的な観察でもその存在を確認できないものである。したがって、古典的クオリアの存在を信じる経験的な理由は存在しない(Dennett 1991: 403)。ここで、主観的な内観を古典的クオリアの存在の証拠として持ち出すこともできるかもしれない。しかし、このように客観的な基準がない状況では主観的な内観の正誤を問うことができないため、内観は古典的クオリアが存在する証拠にはならない。この点にはウィトゲンシュタインの議論が援用される。ある主体がある主観的な感覚に E と名付けたつもりでも、客観的な基準がない以上、その主体が E を同定している証拠は存在しえない(Wittgenstein 2003, § 258, cf. 篠原 2008: 204-8)。内観によっても把握できるか分からない古典的クオリアは「箱の中の甲虫」のようにそれが存在するといういかなる証拠もない(Wittgenstein 2003, § 293, cf. Dennett 1988: 48-9)<sup>7</sup>。

内観の正誤を問うことができないという問題を避けるために、古典的クオリアに関する主体の判断は不可謬であると論じることもできる(Lewis 1929: 121, 125)。すなわち、内観による判断は必ず正しいと主張するのである。しかしそうだとすると、古典的クオリアは主体の判断から論理的に構成されるものであると考えることを妨げる理由はない。すなわち、デネットが述べるように、「ある主体の経験がクオリア F を持つのは、その主体がその経験がクオリア F を持つと判断するときであり、そしてそのときに限る」という定義が成り立つ(Dennett 1988: 55)<sup>8</sup>。このように考えると、なぜ内観が不可謬と言えるのかを説明することができる。しかしそうだとすると、主体の判断は機能的なものなので、クオリアは機能的性質に還元されることになるが、そのようなクオリアはもはや古典的クオリアの定義に当てはまらない。クオリアを機能的性質に還元するということは、古典的クオリアの存在を否定することである。

以上のように、古典的クオリアの存在はあまりにも疑わしかったため、クオリア概念の減量が進められることになる。ここで、クオリアという語にまわりついた疑わしいイメージを避けつつも、何らかの意味でクオリアの存在を認めたかった哲学者たちは、代わりに「現象的性質」あるいは「現象的性格」という語を使い始める。これが減量クオリアの誕生である。

現象的性質もとい減量クオリアの存在は否定しがたいとされている(e.g. Chalmers 2010: 5; Tye 2017)が、フランキッシュが主張するように、その想定は誤っているように思われる(Frankish 2012)。彼はこのことを示すために、減量クオリアの候補を列举し、それら全てが実際は古典的クオリアかゼロ・クオリアのいずれかでしかないことを論じるという方法をとる。本稿では彼のこの議論を、クオリアの歴史を描き出す中で簡単に再構成する。具体的には、急進的实在論者が提案する減量クオリアの候補は実際は古典的クオリアであり、保守的实在論者が提案する減量クオリアの候補は実際はゼロ・クオリアであると論じる。

急進的实在論者による減量クオリア概念の嚆矢となるのは T. ネーゲル「コウモリであるとはどのようなことか」で提示された、ある経験を持つとは〈どのようなことか〉という概念である(Nagel 1974)<sup>9</sup>。これは三人称的観点からは決して把握できないものとされた。この概念を受け継ぐ D. チャーマーズはこれ

をクオリアと同一視し、これは物理主義的に還元不可能であると論じる。それゆえ彼の立場は急進的実在論である。

一方、彼は自身の採用するクオリア概念は減量クオリア概念であると主張する。

私の用語法では、クオリアとは単に、ある意識的状态を持つとはどのようなことか、によってその状態を特徴づけるような性質のことである。この定義は、クオリアは内在的であるとか非志向的であるといった何らかのさらなる実質的要件を含むものではない。(Chalmers 2010: 104n)

したがって、チャーメーズは古典的クオリアを少なくとも自覚的には受け入れていないことになる。しかし、彼の議論を詳細に見ると、実際にその存在を想定しているのは古典的クオリアであるように思われる。例えば彼は、クオリアを非機能的性質であると論じる(e.g. *ibid.*: 6ff, 28ff)。それゆえまた、クオリアの存在は一人称的な観点からのみ把握され、三人称的な実験では確かめられない。彼曰く「我々は意識を直接に測定することはできないので、信仰による跳躍(a leap of faith)のようなものをなさなければならない」(*ibid.*: 92)。このようなクオリアは主観的かつ内在的である。さらにまた、チャーメーズが想定するクオリアは言表不可能である。それは公共言語で直接に表現することができない(*ibid.*: 272)。したがって、急進的実在論者が提案する減量クオリアの候補は、古典的クオリアの抱えていた問題を受け継いでいるという点で、減量された概念、すなわち、問題のある仮定を取り除いた概念とは言えないように思われる<sup>10</sup>。

急進的実在論者が提案した概念は実際には古典的クオリアであり、やはりその存在が疑わしいものであった。他方、保守的実在論者はそのようなクオリア概念を採用せず、機能的なクオリア概念を提案してきた。そのような提案として代表的なものは、表象主義によるクオリアの説明である。表象主義者であるF. ドレツキ曰く「経験の質すなわちクオリアとは、対象が持つと表象<sup>s</sup>される性質にほかならない」(Dretske 1995: 65, cf. 鈴木 2015; Lycan 2019)<sup>11</sup>。ここでクオリアは経験が持つ性質ではなく、対象が持つと経験が表象する性質ということになっている。急進的実在論が、クオリアを、ある経験を持つとは〈どのようなことか〉というように、経験のあり方として特徴づけていたのに対し、保守的実在論は表象された対象のあり方として特徴づけるのである。

しかしこのようなクオリアを実在すると考えることはできない。というのも、表象された性質は実際に例化されているとは限らないからである<sup>12</sup>。例えばピンクの象が見える幻覚の場合、経験が表象するピンク色性は実際には例化されていない。というのも、それが例化されるべき対象(ピンクの象)が存在しないからである。したがって、保守的実在論の代表格である表象主義の主張を字義通りに理解するならば、少なくとも幻覚の場合、クオリアの消去を主張していることになる。

以上のように、典型的な保守的実在論の主張を字義通りに理解すると、実は非実在論であるということになる。一方、そのような帰結を避けるために、字義通りの解釈を放棄し、次のような解釈をすることも可能かもしれない。すなわち、保守的実在論は、クオリアを、「ある質的性質が現れていると表象する」という経験の性質として捉えている、という解釈である。表象主義によると、真正の知覚であれ幻覚であれ、経験は何かを表象するという性質を持っているため、これをクオリアと捉えれば、経験の対象の有無に関わらず、確かにクオリアは存在することになる。しかし、このクオリア概念は減量クオリアではなく、ゼロ・クオリアである。というのも、それは何らかの質的性質そのものではなく、質的性質が存在しているかのように我々に思わせるものに過ぎないからである。したがって、この解釈においても、保守的実在論の主張が実際には非実在論であるという帰結を避けることはできない。ここに来て、クオリアの減量はその含意が「ゼロ」になるまで推し進められたことになる。

以上、ルイスから始まり、表象主義にまで至るクオリア概念の歴史を概観した。ここから分かるのは、古典的クオリア概念には様々な問題含みの仮定があること、そして問題含みの仮定を取り除いた減量クオリア概念は、内実の定まらない不安定な概念であり、各々の存在論的立場からポジティブに特徴づけようとする古典的クオリアかゼロ・クオリアのどちらかへと崩壊するということである。このような状況において、我々には探究に値するクオリア概念を提案するための二つのアプローチがある。一つは、古典的クオリアやゼロ・クオリアへと崩壊しない、安定した減量クオリア概念を見つけ出すこと、もう一つは、

古典的クオリアあるいはゼロ・クオリア概念を採用し、採用した概念における懸念を取り除くことである。従来のクオリアに関する議論では前者のアプローチが盛んに取り込まれてきたが、そのアプローチにおいてクオリアに関する混乱が取り除かれていないのは上で見た通りである。そこで私は後者のアプローチをとり、ゼロ・クオリアが探求に値することを主張したい。

#### 4. ゼロ・クオリア

ゼロ・クオリアについて探究するということは、クオリアの非実在論、すなわち錯誤主義を擁護することである。それゆえ、ゼロ・クオリアが探究に値することを示すためには、錯誤主義の利点を明らかにし、同時にその欠点を補えばよい。

ここまで、錯誤主義をクオリアの実在論と対比させるために非実在論と呼んできたが、ここからはその呼び名は（あるいは消去主義という呼び名も）使わない。というのも、フランキッシュが言うように、非実在論という表現は誤解を招くからである(Frankish 2017:11)。錯誤主義によると、意識現象は存在しないのではなく、錯誤として、すなわち、我々に古典的クオリアが存在するかのように思わせる物理現象として存在する。存在しないのは、不思議な特徴を持った古典的クオリアそのものの方であり、これを存在するかのように思わせる意識現象の方ではない。この主張を理解するために、デネットの示したマジックのアナロジーは有用である(Dennett 2003)。魔法(magic)は存在しないが、手品(magic)は存在する。すなわち、不思議な術としてのマジックは存在しないが、不思議な術かのような見せかけを持つ諸々のトリックの集まりとしてのマジックは確かに存在するのである。意識もこれと同様である。不思議な古典的クオリアを本質とする意識は存在しないが、古典的クオリアが存在するかのように我々に思わせる錯誤としての意識は存在する。ここでは、魔法の存在が否定されるのと同じように、古典的クオリアの存在が否定されているが、手品の存在が肯定されるのと同じように、錯誤としての意識の存在が肯定されている。錯誤主義という呼び名を用いるのは、この点を明確にするためである。

では、このような錯誤主義の利点はどこにあるだろうか。フランキッシュは錯誤主義の利点として、意識が、物理主義的には不思議な性質を持つかのように思われる理由と、それでいて物理的な因果的効力を持つ理由の両方を説明できることを挙げている(Frankish 2017: 28-9)。これは、急進的実在論と保守的実在論の利点を受け継ぎ、欠点を克服しているということである。急進的実在論は、意識が古典的クオリアを持つことを認めることで、それが内在性、言表不可能性、非機能性、あるいは不可謬性などの不思議な性質を持つように思われる理由を説明することができる。すなわち、そのように思われるのは、意識が実際にそのような性質を持つ古典的クオリアを本質とするからである。この主張は、意識が古典的クオリアを持つかのように思われる直観を説明することができるが、その代わり、意識に因果的効力があることを認めることができない。というのも、それが機能的性質であることを否定するからである。他方で、保守的実在論は、クオリアの実在性を穏健な形で認めるために、それが不思議な性質を持つことを否定し、機能的性質として説明するので、なぜ意識が因果的効力を持つのかを説明することができる。しかし当然、なぜ意識が不思議な性質を持つかのように思われるのかを説明することができない（あるいは、説明しようとする前節で示したようにゼロ・クオリア概念を用いることとなり、非実在論へと崩壊する）。以上のような実在論に対して、錯誤主義には次のような説明が可能である。意識が古典的クオリアのような不思議な性質を持つかのように思われるのは、そのような錯誤を生み出すのが意識現象であるからである。また、意識が因果的効力を持つのは、その本質である錯誤が（手品同様）実在する物理現象であり、機能的性質を持つからである。そして、この錯誤を可能にするような機能的性質が、ゼロ・クオリアである。

ここで紹介したのは錯誤主義の大まかな見取り図に過ぎない。その説明力は具体的な錯誤主義理論が構築されることで補強されるだろう。以下ではその足がかりとして、錯誤主義に向けられる反論の中で最も重要と思われるものを取り上げ、それを克服する説明を与える。

フランキッシュは錯誤主義に向けられる反論をいくつか取り上げているが(ibid.: sect. 3)、私が特に注目したいのは次である。すなわち、古典的（あるいは減量）クオリアが存在しないなら、なぜそのような概念を我々は獲得できるのかが謎であるというという反論である<sup>13</sup>。フランキッシュはこれに対して「錯誤

主義の中心問題であり、これに答えることはイリュージョン・プロブレムの解決へと向かう長い道のりになるだろう」(ibid.: 35)と述べ、大まかな方針を提案するとどめている。彼の提案の一つによると、古典的クオリア概念は素朴な一般的理論的概念と再認的概念の混合であるという。

我々が現象的性質についての一般的な理論的概念を持っているとしよう。[...] また、我々はさまざまなタイプの感覚状態を、それが生じたときに内観的に再認する能力を持ち、そしてその同定された状態に再認的概念を連合させることができるであろう。このとき、現象的概念は一般的な理論的概念と特定の再認的概念を合わせた混合物である。(ibid.: 36)

まず、我々の意識に関する素朴な理論的概念は、ある感覚的状态が持つ性質を古典的クオリアとして誤って同定させる。ついで、その性質について「この種の現象的性質」というような再認的概念を形成する。この概念を行使することにより再認されるかのように思われるのが古典的クオリアである。しかし、錯誤主義が正しければ、実際にその概念が追跡している性質は何らかの複雑な物理的性質であるので、この概念は指示に失敗しており、この概念の行使が古典的クオリアの存在を示しているわけではない。以上のような説明によると、その概念が追跡している何らかの複雑な物理的性質が、我々に古典的クオリアが存在するかに誤って思わせるもの、すなわちゼロ・クオリアということになる。

以上のような戦略に誤っている点はないように思われる。しかし大まかな方針に過ぎない以上、説明不足な点がある。ゼロ・クオリアが、感覚的状态が持つ物理的性質だとすると、それはたしかに経験に例化されている性質であることになるが、それが実際に例化されている性質だとすると、古典的クオリアが持つとされていた問題含みの特徴は持たないはずである(持つとしたらそれはゼロ・クオリアではなく古典的クオリアであることになってしまう)。では、なぜそのような問題のないゼロ・クオリアを、素朴な理論的概念は問題含みの古典的クオリアとして同定させるのか。錯誤主義が(保守的实在論とは異なり)意識が不思議な性質を持つかのように思われる理由を説明できると標榜するならば、その擁護者はこの点を明らかにせねばならないが、フランキッシュの提案においてはそれがいかに達成されるのかは明らかではない。

彼の提案がこのような不明瞭な点を抱える原因は、彼が内向的錯誤主義(inward-looking illusionism)を採用しているからだと思われる(ibid.: sect. 1.4)。内向的錯誤主義とは、誤って古典的クオリアと思われているものの正体を、感覚的状态が持つ物理的性質、すなわち経験そのものが持つ物理的性質と同定するタイプの錯誤主義である。経験が実際に持つ物理的性質には、一見して問題含みの特徴がないため、それがなぜ問題含みの古典的クオリア概念を我々に抱かせるのかを説明することは困難である。

私はこの問題を、外向的錯誤主義(outward-looking illusionism)を擁護することで回避しようと考えている。外向的錯誤主義とは、誤って古典的クオリアと思われているものの正体を、経験そのものの物理的性質ではなく、経験の対象が持つと表象される物理的性質と同定するタイプの錯誤主義である<sup>14</sup>。この理論は表象主義の説明を援用する(本稿第三節を参照)。以下で、外向的錯誤主義がどのように古典的クオリアの直観を説明するか、私の考えを示す。

外向的錯誤主義によると、我々が誤って古典的クオリアと考えていたものは、経験の対象が持つと経験が表象する物理的性質である。例えば、意識に現れる色性質は、外界の対象が持つ表面反射特性などの物理的性質である<sup>15</sup>。このような物理的性質は、経験そのものが持つ物理的性質同様、一見して問題含みの特徴がないため、それがなぜ問題含みの古典的クオリア概念を我々に抱かせるのかを説明することが困難である、という内向的錯誤主義の問題をそのまま引き継ぐように思われるかもしれない。しかしそうではない。外向的錯誤主義は内向的錯誤主義にはない説明資源が利用できるからである。それは、経験が表象する性質は、真正な知覚のときは例化されているが、幻覚のときは例化されていないということである。内向的錯誤主義は、古典的クオリアの正体を、経験そのものの物理的性質と同定する。そのため、真正な知覚の場合であれ幻覚の場合であれ、(幻覚も経験であるので)それは実際に例化されている性質であることになる。一方、外向的錯誤主義は、古典的クオリアの正体を、経験が表象する外界の対象の物理的性質と同定する。そのため、それは真正な知覚の場合は(対象が存在するので)実際に例化されているが、

幻覚の場合は（対象が存在しないので）実際には例化されていないことになる。

しかし、我々は、我々の意識に現れている性質は実際にどこかに例化されていると考える強力な直観を持っている。これを、篠原(2008)に倣って「クオリア実感」と呼ぼう<sup>16</sup>。クオリア実感により、我々は、幻覚の場合も、意識に現れている性質がどこかに例化されていると考える。クオリア実感とは、内向的錯誤主義の観点からは誤りではない。意識に現れている性質が経験の性質なら、幻覚の場合も、当の幻覚経験にその性質が例化していると考えればよいからである。一方、意識に現れている性質が外界の対象の性質であるとする外向的錯誤主義によると、幻覚の場合、クオリア実感とは誤りである。というのも、幻覚の場合（真正な幻覚の場合を除き）、外界の対象にその性質は例化されていないからである。例えば、緑色のものが見える幻覚において、緑色性を実現する表面反射特性を持つ対象は外界に存在しない。この、クオリア実感が誤りであるという事実が、外向的錯誤主義特有の説明資源である。このことは、なぜ我々が、意識は古典的クオリアのような不思議な性質を持つように思うのかということの説明する。古典的クオリア概念を我々が持つのは、クオリア実感が誤りであるにもかかわらず、それを常に信じる傾向があるからである。以下で、クオリア実感がどのように古典的クオリア概念を生み出すのかを説明しよう。

クオリア実感を信じるならば、緑色のものが見える幻覚の場合でも、緑色性がどこかに例化されていなければならない。しかし、幻覚である以上少なくとも外界の対象には例化されていない。それゆえ意識に現れる緑色性は、外界とは無関係に、意識経験そのものに内在的に例化されていると考えたくなる。また、緑色性が意識経験そのものに内在的に例化されているとすると、それは主観的性質であると考えられる。というのも、経験に内在的な緑色性が客観的性質だとすると、緑色の対象を見る経験において、客観的な意味での内側、すなわち脳が緑色になっていることになるが、これは端的に偽であるからである。そして、「緑色性」が主観的性質だとすると、その性質は公共的な言語で指示されるものではない。というのも、公共的な言語が指示するのは客観的な性質だからである。それゆえ、「緑」という公共的な言語に属する語ではそれを指示したことにはならない。ここで、我々は意識に現れる性質を言表不可能だと考えたい。また、その「緑色性」が経験の内在的性質だと考えると、それは物理的内在的性質、すなわち脳状態の性質ではない。というのも、幻覚を見ているとき脳が物理的に緑色になっているわけではないからである。それゆえ、「緑色性」は非物理的内在的性質、すなわち非物理的な意識状態の性質と考えたい。クオリア実感が駆動する以上の推論により、我々は内在的かつ主観的で、言表不可能な非物理的性質である古典的クオリアの存在を信じるに至る。

以上の議論をまとめると次のようになる。幻覚の場合、意識に現れている性質が物理的に例化されているということはない。しかし、クオリア実感が正しければ、意識に現れている性質はどこかに例化されていなければならない。この二つの要求を同時に満たそうとすると、古典的クオリアのような不思議な理論的概念が生み出されることになる。一方、この問題に対する錯誤主義の提案は簡単である。後者の要求を棄却する、すなわち、幻覚の場合、クオリア実感とは偽であると主張するのである。

そして外向的錯誤主義は、クオリア実感が必ずしも真ではないにも関わらず、なぜここまで強力なのかも説明することができる。クオリア実感が強力なのは、幻覚ではなく、真正な知覚の場合、意識に現れている性質は実際に例化されている性質であるからである。例えば、緑色のものが目の前にあり、それを見て緑色性が現れる意識経験を持つ場合、その緑色性は錯誤ではなく、実際に外界の対象に例化されている。つまり、真正な知覚の場合に限りクオリア実感とは正しい。クオリア実感を我々（特に急進的実在論者）が根強く持ち続けるのは、真正な知覚の場合、すなわち多くの場合、クオリア実感とは正しいからである。

ここまでの議論から、古典的クオリアが存在するかのように思わせるもの、すなわちゼロ・クオリアの正体もおのずと明らかになる。それは、クオリア実感を可能にしている何らかの性質である。そして、クオリア実感とは、意識に現れている性質が実際に例化されていると思わせる直観であるので、これを実現しているのは我々の知覚的表象システムである。というのも、知覚的表象システムは、何らかの性質が例化されていることを主体に伝えるものであるからである。したがって、ゼロ・クオリアとは、我々の知覚的表象システムが持つ、何かを知覚的に表象するという性質である。

ここで、次のような疑問が生じるかもしれない。外向的錯誤主義は古典的クオリアの正体を経験が表象する外界の対象の性質と同定するはずなので、古典的クオリアの正体がゼロ・クオリアだとすると、それ

が外界の対象ではなく、表象システムの特定の状態、すなわち経験が持つ性質と主張することは不自然ではないか、という疑問である。この疑問に対する外向的錯誤主義の答えは、古典的クオリアの正体はゼロ・クオリアではない、というものである。ゼロ・クオリアはあくまで、古典的クオリア概念を生じさせるという条件を満たしていればよく、それ自体が古典的クオリアの正体である必要はない。この点は、内向的錯誤主義と外向的錯誤主義の違いでもある。内向的錯誤主義が、古典的クオリアの正体としてゼロ・クオリアを同定するのに対し、外向的錯誤主義は、古典的クオリアの正体としては外界の対象の性質を同定し、それを古典的クオリアであるかのように我々に思わせる性質として、それとは別に経験の性質であるゼロ・クオリアが存在すると考える。ゼロ・クオリアをこのように定式化しても、フランキッシュの定義とは合致している。

## 5. 結論

以上、錯誤主義の利点を明らかにし、その欠点を乗り越えるものとして外向的錯誤主義によるイリュージョン・プロブレムの説明を試みた。ここまでで示されたのは、我々に古典的クオリアが存在するかのようには思わせているのは、表象システムが持つ、何かを表象するという性質であるということである。もちろん、これがゼロ・クオリアの正体だとしても、我々が何かを表象するということがどのようにして可能になるのか、などといった問いが残るだろう。これは、我々がゼロ・クオリアを持つのはいかにしてかという問いであり、これに取り組むことは、ゼロ・クオリアを探究することに他ならない。もし、以上で主張したような外向的錯誤主義の説明が有望であるとすれば、ゼロ・クオリア概念は、意識に対する新しい理解をもたらし、かつ実り豊かなリサーチ・プログラムを提供するという点で、探究に値するものであると言えるだろう。

## 註

1. 念の為、錯誤説(error theory)と識別できるように訳したが、錯誤主義は意識に関する錯誤説と考えて問題ない。
2. 反物理主義的還元主義も論理的には可能である。物理的でも意識的でもないものにクオリアを還元するのである。汎原心論(panprotopsychism)は、クオリアをマイクロ現象的なもの(マイクロ現象的なものはそれ自体意識的ではない)に還元するため、これに当てはまるかもしれない(Chalmers 2010: 134f)。しかし、マイクロ現象的なものが意識的なものとどれほど異なるのかを評価するのは困難であり、このような立場を非還元主義と本当に区別できるのかは明らかではない(cf. 高村・鈴木 2020)。何にせよ論じるには大きすぎる主題であるので、本稿では扱わず、チャーマーズの立場は急進的実在論の一種として考える。
3. ただし、内在的性質であることは厳密には、機能的あるいは表象的性質でないことを含意しない。そのように考えられているのは、機能的あるいは表象的性質が本質的に関係的性質であるかのように誤解されていることに由来する。機能的あるいは表象的性質が傾向的性質だとすると、それらは内在的性質である(cf. 柏端 2017: 170f)。しかし本稿では簡便のため形而上学的な細かい区別はおいておくことにする。
4. ではなぜゼロ・クオリアがクオリアと呼ばれうるのかが疑問に思われるかもしれない。実のところ、それは単なる表現の問題に過ぎず、「クオリアかのように見えるもの」や「クオリアをあると思わせるもの」と呼んでも構わない。
5. 古典的クオリアと相性がいいのは急進的実在論だけであるが、急進的実在論は古典的クオリア以外と相性が悪いわけではなく、論理的には減量クオリア概念を採用することもできる。
6. ルイスは「対象」を与件と区別し、それがどのような性質を持つかについて我々が誤りうるような客観的对象の意味で用いる(Lewis 1929: 121)。彼がクオリアは対象の性質ではないと述べるのはこのためである。本稿はこの用語法を採用せず、「対象」を広く、経験に現れている、あるいは経験が志向しているものという意味で用いる。経験の対象として与件を含むようなこの用語法は、分析的な知覚の哲学の初期の議論に基づいている。本文でも述べるように、ルイスのクオリアはセンスデータの性質として解釈できるが、センスデータ概念が哲学に導入されたのは本来「知覚の直接の対象は何か (what are the direct objects of perception?)」という問いに答えるためだった(Crane 2000: 172)ので、それは(少なくとも最初期は)経験の対象として特徴づけられたものであり、それゆえルイスのクオリアは経験の対象の性質と言える。
7. ただしウィトゲンシュタイン自身はクオリア(箱の中のもの)の存在を否定しているわけではなく、「言語ゲームから消え去る」としか述べていない(Wittgenstein 2003, § 293, cf. 鬼界 2020 第九章注 18)。いずれにせよ、本稿はウィトゲンシュタイン解釈には深入りしない。
8. 「判断する」は強すぎると思われるなら、「判断する傾向性を持つ」と読み替えてもよい。いずれにせよ機能的性質となる。

9. ただしネーゲル自身はクオリアという表現を用いていない。
10. チャーマーズはクオリアの定義の段階ではその内在性を主張しないのに対し、議論の段階においてクオリアは内在的性質であると主張する。これは減量クオリア概念を導入したのちに、増量させていると考えることもできる。しかし、結果的に古典的クオリア概念を採用していることには変わりがない。
11. 「表象<sup>s</sup>する」とは、ドレツキが導入した表象の仕方の区別のうちのの一つだが、ここでは問題ではない。
12. これは例化の問題と呼ばれる(信原 2002: 122; 鈴木 2007: 252)。
13. 正確には、フランキッシュはこの論文では古典的(あるいは減量)クオリアという表現は用いず、代わりに現象的性質と表現する。そして同様に古典的(あるいは減量)クオリア概念を現象的概念と呼ぶ。
14. 錯誤主義に関する内向的/外向的の区別はフランキッシュが導入したものであり、彼自身、外向的錯誤主義も理論的選択肢の一つであると述べている(Frankish 2017: sect. 1.4)。彼が内向的錯誤主義の立場を中心に議論を展開するのは、それが外向的錯誤主義よりもっともらしいと考えているからではなく、単に「現象的性質は経験の性質であるという広く支持された見解に従って」いるだけである(ibid.: 19)。要するに、彼が内向的錯誤主義を採用するのは、標準的見解に極力従うことで、何が錯誤主義の中心的主張なのかを明確にするという論文執筆上の技術的な理由による。
15. 正確には、色性質はある適切な状況のもとである特定の経験を主体に抱かせる傾向性として分析するのがよい(cf. 小草 2018)。ただし、傾向性はその因果的基盤である事物の物理的内在的性質と形而上学的に同一視できるので、とりあえず本文に記述したような理解で問題ない(cf. 柏端 2017: 170f)。
16. この直観は「現れの呪縛」(信原 2002)などとも呼ばれる。また、いわゆる現象原理の背後にある直観もこれと同じものであると思われる(Robinson 1994)。

## 参考文献

- Chalmers, D. (2010). *The Character of Consciousness*. Oxford University Press. (『意識の諸相』上・下, 太田 紘史, 源河亨, 佐金武ほか訳, 春秋社, 2016年.)
- Crane, T. (2000). "The Origins of Qualia" *The History of the Mind-Body Problem*. T. Crane & S. Patterson (eds.), London: Routledge, pp. 169-94.
- Dennett, D. (1988). "Quining qualia" *Consciousness in Contemporary Science*. A. J. Marcel & E. Bisiach (eds.), Clarendon Press, pp. 42-77.
- (1991). *Consciousness Explained*. Boston: Little, Brown. (『解明される意識』 山口泰司訳, 青土社, 1998年.)
- (2003). "The Illusion of Consciousness" *TED conference*.  
[https://www.ted.com/talks/dan\\_dennett\\_the\\_illusion\\_of\\_consciousness](https://www.ted.com/talks/dan_dennett_the_illusion_of_consciousness)
- Dretske, F. (1995). *Naturalizing the Mind*. MIT Press. (『心を自然化する』鈴木貴之訳, 勁草書房, 2007年.)
- Frankish, K. (2012). "Quining diet qualia" *Consciousness and Cognition*, 21(2), pp. 667-76
- (2017). "Illusionism as a Theory of Consciousness" *Illusionism: As a Theory of Consciousness*. K. Frankish (ed.), Imprint Academic, pp. 11-39.
- Harman, G. (1990). "The Intrinsic Quality of Experience" *Philosophical Perspectives 4: Action Theory and the Philosophy of Mind*, Atascadero. J.E. Tomberlin (ed.), Ridgeview, pp. 31-52.
- Lewis, C. I. (1929). *Mind and the World Order: Outline of a Theory of Knowledge*. Dover Publications, Inc.
- Lycan, W. (2019). "Representational Theories of Consciousness" *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Peirce, C. S. (1866/1982). "Lowell Lecture" (ix) *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Edition*. M. H. Fisch (ed.), Indiana University Press, pp. 407-23.
- Robinson, H. (1994). *Perception*. Routledge.
- Nagel, T. (1974). "What is it like to be a bat?" *The Philosophical Review*. Vol. 83, No. 4, Duke University Press, pp. 435-50
- Tye, M. (2017). "Qualia" *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Wittgenstein, L. (2003). *Philosophische Untersuchungen*. Suhrkamp. (『哲学探求』 鬼界彰夫訳, 講談社, 2020年.)
- 小草泰 (2018). 「色の傾向性理論を擁護する——色の現象学と存在論」, 『科学基礎論研究』, 45, pp. 1-

21.

柏端達也 (2017). 『現代形而上学入門』, 勁草書房.

篠原成彦 (2008). 「クオリアとクオリア実感」, 長滝祥司, 柴田正良, 美濃正編 『感情とクオリアの謎』, 昭和堂, pp. 198-217.

鈴木貴之 (2007). 「訳者解説」, F. ドレツキ 『心を自然化する』, 鈴木貴之訳, 勁草書房.

—— (2015). 『僕らが原子の集まりなら, なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか——意識のハード・プロブレムに挑む』, 勁草書房.

高村夏輝, 鈴木貴之 (2020). 「汎心論は再起動するか」, 『現代思想』. 48(8), 青土社, pp. 110-122.

信原幸弘 (2002). 『意識の哲学——クオリア序説』, 岩波書店.